

# 新発見入唐高麗移民墓誌からみた唐代東アジアの人流

拝 根興  
(土屋 昌明 訳)

## 前 言

7・8世紀、東アジア大陸国家の人流は頻繁さを増し、かつ集団的な流動性をみせるようになった。隋の煬帝の遠征は、流星のような隋王朝の消失を導き、多くの隋朝の捕虜が高句麗に停留することとなった。東突厥の敗戦により、唐朝は突厥人を長安周辺に居住させるように配置した。百済の滅亡後、数万もの人々が唐に入ったり、倭国に流れ込んだりした。そして高句麗滅亡後には、数十万の人々が唐朝の境域に入り込み、倭国にまで移った者も少なくなかった。戦争が招いた人流以外にも、平和状態での行商、使者、留学生、仏僧の求法巡礼、その他の宗教の宣教なども、人流の重要なプロセスである。このような人流によって、東アジア各民族国家間の交流も増加し、発展段階の違いによって生じた地区間のアンバランスが調整され、双方向あるいは多方向的な文化伝播が促進された。もちろん、唐朝内に居住した周辺民族の人々は、次第に唐人としての成分を構成するようになり、彼らなりに唐王朝の繁栄に貢献することになる。

入唐高句麗遺民の墓誌の研究は、20世紀初頭の学界においてすでにおこなわれていた<sup>(1)</sup>。筆者も近年、いくばくかの論著を出版した<sup>(2)</sup>。2012年以後に出土した高句麗からの移民である高牟、高提昔、南单徳、李隠之、高乙徳らの墓誌は、国内外の学界から重視されている<sup>(3)</sup>。これらの墓誌は民間あるいは公共の博物館に所蔵されている。本稿は、既往の研究を基礎にして、新発見の入唐高句麗移民の墓誌のうち、いまだ論及されていないもの、および論及されていても不十分なものについて、討論を加えたい。当然ながら、この時期の百済移民、新羅居留民、および日本側の「人流」の問題については、あらためて具体的な検討をすることとする。

## 一、高提昔墓誌銘

王其禕、周曉薇は2013年に高句麗移民である「高提昔墓誌銘」の情報を発表した。具体的には、2012年初頭に西安東郊の龍首原上で、初唐の高句麗人の墓誌が一件出土したのであり、これが上元元年(674)の「高提昔墓誌」である。墓誌の高さ、幅とも38センチメートル、誌文は20行で、一行19字、楷書、マス目がある。墓誌蓋は斗をふせた形、墓誌蓋の拓本の高さ、幅とも38セ

ンチメートル、蓋の上部は高さ、幅とも 27 センチメートル、蓋の題は「大唐泉府君故夫人高氏墓誌」の 12 字、4 行、行 3 字、陰文の篆書、マス目無し。蓋の題の四周および誌蓋の四方向に唐草文の線刻がある。墓誌文は次のようである。

大唐右驍衛永寧府果毅都尉泉府君故夫人高氏墓誌

夫人諱提昔、本国内城人也。原夫蟬冕摘華、疊清暉於往躅；潢漪湛態、挺芳烈於蘭闌。曾祖伏仁、大相、水鏡城道使、遼東城大首領。祖支于、唐易州刺史、長岑県開国伯、上柱国。父文協、宣威將軍、右衛高陵府長上折衝都尉、上柱国。往以貞觀年中、天臨問罪、祖乃婦誠款塞、率旅賓庭。爰賞忠規、載班清級、因茲胤裔、族茂京都。夫人即長上折衝之元女也、德芬蘭苑、声冠礼闈、博綜情田、遵母儀之雅訓；洞苞靈府、憲女史之弘規。然而結聘泉門、纔盈晦朔、未諧婦展、俄事淪亡、惟其所生、悲摧玉掌。粵以咸亨五年六月四日卒於來庭里之私第、春秋廿有六。莫不璧淪朝彩、婺黯霄暉、風碎瑤柯、霜凋玉樹。秦鏡悲其驚戢、孔匣詠其龍沈。遂使閭閻宿交、望素車而下泣；里閭親好、輟朱紱以表哀。以上元元年八月廿五日窆於万年県涇川之原礼也。將恐秋陽通序、陵谷遷迴、所以罔撰芳猷、樹旌幽壤。其詞曰：

弈葉崇構、蟬冕代暉。外諧懿範、内穆蘭闌。如何景落、泉帳孤棲。幽局永闕、寒隴淒淒。

王氏、周氏の論文は主として、高提昔の祖父である高支于・父親の高文協の入唐時期、墓主である高提昔の婚姻およびその夫の泉氏、高提昔の亡くなった場所および埋葬地、「高提昔墓誌」に見える官名と地名、出土墓誌に見える入唐高句麗移民の高氏一族など、五つの問題を検討している。この論文はすでに墓誌銘に関連する各方面に全面的におよんでいるといえる。たとえば、高提昔の祖父である高支于と貞觀十九年に唐朝に降伏した高句麗の薩褥高惠真との比較、国内城、大相、水鏡城、道使といった、墓誌にみられる高句麗の地名や官名などの検討、高提昔が 26 歳になって泉氏と婚姻した原因の推論など、広い視野と非凡で着実な考証能力をうかがわせるにたる研究成果である。印刷あるいは校正の原因により、論文中に新羅末・高麗初の著名な留唐賓貢進士である崔彥搆、すなわち崔仁滾<sup>(4)</sup>に言及した時に、崔仁滾を「崔仁流」に誤植している点は、特に指摘しておくべきかと思う。

韓国の学者である金榮官も「高提昔墓誌」に関する論文を発表している<sup>(5)</sup>。その文中、墓誌にある「天臨問罪、祖乃婦誠款塞、率旅賓庭」にもとづき、高提昔の祖父の高支于が唐朝に帰順したのは、貞觀十九年の唐太宗が高句麗に親征した時だと証明し、また当時の戦争の進展状況からして、高支于が唐朝に降伏したのは、具体的には唐軍の遼東城、駐蹕山〔訳注：首山、遼寧遼陽県西南十五里〕の二度の戦役の間だとする。この結論は、上述の王其禕論文の述べるところと同じである。このほか金榮官氏は、高提昔の曾祖父の高伏仁は、まさに唐の太宗が遼東城を征伐した時の遼東城の大首領であり、おそらくこの時に唐朝に降伏したのだと考えている。これについて筆者は、疑問点が多く、おそらくこのような結論は出せないと考えている。高文協の長女として、高提昔は咸亨五年六月に亡くなった。これは 674 年、時に 26 歳、したがって出生は 649 年である。一般的に 20 年で一代と推算する慣例によれば、高提昔の父親である高文協の生年は 629 年ころ、祖父の高支于の生年は 609 年ころ、曾祖の高伏仁の生年は 589 年ころとなる。高伏仁は遼東城大首領を担任したことがあり、そのとき 40 歳前後だったとすれば、それは 629 年こ

ろとなる。高支于が父の遼東城大首領の職位を継承したかどうか、ある人物が父親の職位を継承したからといって、その他の人物が同じように父親の職を継承したとか、継承するものかどうか推論するには、慎重に考えなければならない。金榮官氏は、墓誌文中の「莫不壁淪朝彩、嫠黯霄暉、風碎瑤柯、霜凋玉樹。秦鏡悲其鸞戢、孔匣詠其龍沈。遂使閭閻宿交、望素車而下泣；里閭親好、輟朱絃以表哀」とある「秦鏡」「孔匣」などから、「朝廷は高提昔の葬礼における悲嘆を思わず、高提昔（家族）と婚姻先の泉氏の家族が唐に服従しかねる気持ちを表わしている」とし、さらに「皇帝の暴政と理解ない嘲弄、および高麗に対する思いと愛情を内に含んでいる」とする。しかし、泉男生と泉献誠父子が時局に迫られて唐に降伏したことや、泉男産と泉男建の兄弟が投降あるいは捕虜として唐朝に至ったことなど、いずれにしても当時の唐と高句麗の関係の必然的流れである。そのうえ泉氏兄弟が、辺境への出征を頻繁に受け入れているのは、どうしようもない選択ではあるが、疑いなく心から願ってのことである。まして唐に生まれ育った高提昔からすれば、祖父や父が唐朝に投降したあと、唐朝の地方中層官吏になったのであるから、開放的で寛容な時代背景の下、他の入唐した民族と同じく、高提昔の幼少期の状況は、それほどひどいものではなかったはずだ。引用文で高支于父子が入唐後に「爰賞忠規、載班清級、因茲胤裔、族茂京都（まじめさをかわれて、すぐれた職位をうけ、子孫家族は長安で栄えた）」とあるのは、こうした点を説明している。最も初期に入唐した高句麗移民として、高提昔と泉氏の家族が婚姻関係を結んだことに、本当は唐朝に対する何らかの不満や憤慨があったのかどうか、墓誌銘の文でははっきり表現されているとは言えないであろう。

墓誌文に「然而結聘泉門、纔盈晦朔、未諧婦展、俄事淪亡、惟其所生、悲摧玉掌。粵以咸亨五年六月四日卒於來庭里之私第、春秋廿有六」とあることから、高提昔は26歳にして泉氏と結婚し、その一ヶ月余りあとに不幸にして夭折したわけで、上に見た史料は、高提昔が不幸にして夭折し、親友や知人がそれを悲しんだと表現しているだけで、金氏が言うように唐朝に屈服しないとか、皇帝の暴政に対して意を含んでいるとかは言えないだろう。当然ながら、入唐高句麗移民の第一世代の婚姻対象が、多くは同じ高句麗移民であるのは、入唐した高句麗人が唐人の共同体に溶け込むには時間がかかることを示しているだけであって、第二・第三世代になって、状況の変化につれて唐人との通婚が普通のことになっていくのである。

高提昔は長安の來庭里の私第で病没した。ここは長安城の東北部にあたり、この時期に入唐した高句麗の貴族や軍人が散居していた主要エリアである。墓誌文の文脈から判断するに、來庭里は高提昔の夫の住まいであろう。

要するに、「高提昔墓誌」の出土は、高句麗から入唐した第一世代の移民の生活状況を了解するについて重要史料であり、特に高提昔と泉氏家族との結婚は、高麗第一の家としての泉氏兄弟が、入唐後の家族の婚姻に選択の余地がなかったことを示しているとも言えよう。

## 二、李隱之、高牟墓誌

### 1. 李隱之墓誌

「李隱之墓誌」は、新発見の入唐高句麗移民の墓誌である。樓正豪氏の未刊論文によると<sup>(6)</sup>、

墓誌は洛陽瀋河区馬坡にある洛陽九朝刻石文字博物館に所蔵されており、これまで学界で言及されたことのない高句麗移民の墓誌史料である。墓誌石の長さは48.5センチメートル、幅は53センチメートル、22行、楷書、墓誌蓋は篆書で「大唐故李府君墓誌銘」とあり、鴛鴦紋と唐草紋がある。墓誌文は次のようである。

唐故贈泉州司馬李公墓誌銘并序

公諱隱之、字大取、其先遼東人也、晋尚書令胤即其枝類。祖敬、父直、或孝德動天、馳名於楽浪、或忠勤濟物、譽表於扶余。公厭海隅之風、慕洛汭之化、重訖納貢、隨牒受官、勇武既自於天然、果斷寧由於學得。異夫子之入夢、且歎山頽、殊仙客之延齡、還嗟海變、嗚呼哀哉！春秋五十有一、以大唐神龍元年正月廿五日寢療終於上林里之私第。朝野痛惜、親故哀傷。帝皇悼懷、贈泉州司馬以成送終之義。遷殯於河南府河南縣平楽郷之原。

夫人河間県君劉氏、貞節孤高、孀居荏苒、在家慕克己之德、訓子從悌隣之規。風樹不停、隙駒難駐、琴亡鶴去、鏡破鸞沈、嗚呼哀哉！春秋八十有六、以大唐開元廿七年四月五日寢疾終於道政里之私第。粵以其年五月壬辰朔五日景申合葬於公之旧塋西南一里半、礼也。前臨清洛、川声夜雜於松風、却背崇邱、嵐氣曉凝於薤露。嗣子初有、左領軍衛翊府右郎將、仲子懷德、左驍衛翊府右郎將、季子懷敏、代州陽武鎮將等。類高柴之泣血、哀慕充窮、若顧悌之絕漿、攀号崩迫。畏桑田之改易、慮高岸之淪移、旁求斯文、以作爾誌。其詞曰：

司馬令德、來從異域、人之云亡、天子贈職、誌不惑兮。夫人道終、合葬順理、二龍次喪、兩鳳倫死、情難已兮。三子至孝、七日絕漿、思親勒石、地久天長、不朽芳兮。

じつは、李隱之のむすこの李懷の墓誌が1928年に洛陽の北16キロメートルの南陳庄村で出土しており、誌石は千唐誌斎博物館に所蔵されている。筆者は2002年に発表した「中国所見韓国古代史関連金石文の現状与展望（中国所見韓国古代史関連金石文の現状と展望）」で「李懷墓誌」に言及し、のちに2009年発刊の「唐高句麗遺民遺址遺物的現状及地理分布（唐の高句麗遺民遺址遺物の現状および地理分布）」という論文<sup>(7)</sup>でも詳しく検討した。そのため「李懷墓誌」にわたる問題は再論しないこととする。

「李隱之墓誌」其先遼東人也、晋尚書令胤即其枝類。祖敬、父直、或孝德動天、馳名於楽浪、或忠勤濟物、譽表於扶余。公厭海隅之風、慕洛汭之化、重訖納貢、隨牒受官、勇武既自於天然、果斷寧由於學得。

「李懷墓誌」昔晋氏乘乾、遼川塵起、帝欲親伐、実要□□。公十二葉祖敏為河内太守、預其選也。克滅之後、遂留拓鎮、俗頼其利、因為遼東人。至孫胤、拳孝廉、仕至河南尹、加特進、遷尚書令、晋之崇也。曾祖敬、隋襄平郡從事。太宗東幸海関、訪晋尚書令李公之後、僉曰：末孫孜在。帝許大用、尽室公行、爰至長安、未貴而没。悲夫！其子曰直、直生隱之、贈清源郡司馬、公則清源府君之冢子也。

楼正豪氏は、これらの史料および『三国志』『晋書』『北史』『新唐書』などにもとづいて、李



隱之と李懷の先祖についてすぐれた考証をおこない、次のような李氏の系譜を作った。

李敏—李信—李胤—□□—□□—□□—□□—□□—□□—李敬—李直—李隱之—李懷—李智通

李隱之の祖父の李敬は長安に居を定めてすぐに逝去し、その父である李直はこのため入唐後の家族的な栄光をそれほど享受しなかった。李隱之本人も官位は高くなく、唐の中宗の神龍元年（705）に亡くなり、享年は51歳、その出生時期は唐の永徽六年（655）となる。その祖父の李敬は唐の太宗の高句麗親征の後、645年に長安に入った。ということは、李隱之は長安ないし洛陽で生まれたのであり、入唐の第二世代の高句麗化した漢人移民ということになる（訳注：「李懷墓誌」に「公の十二葉の祖の敏は河内太守と為る…因って遼東の人と為る」とある）。だとすると、李隱之の結婚対象は河間県君の劉氏であり、劉氏が漢人であることは疑いない。ただし、同様に入唐した高句麗化した漢人であるかは知りたい。李懷は天宝四載（746）に病死、享年は68歳、出生は678年、長男として李懷は、父の李隱之が23歳の時の子となる。あきらかに、入唐した高句麗化した漢人と純粋な高句麗人とは、やはりある程度の差異があり、婚姻対象の選択や、唐朝に対するアイデンティティの深さ、入唐後の任官や性質などにそれがあらわれる。

また、楼正豪論文は「李隱之墓誌」の出土地を示していない。李隱之の誌文には「大唐神龍元年正月廿五日寢瘳終於上林里之私第」とあるが、夫人劉氏は「大唐開元廿七年四月五日寢疾終於道政里之私第」とある。李懷も「道政坊（里）」で亡くなっている。つまり、李隱之・李懷の家族は、上林里から道政里に移転したものか、二つの宅地を備えていたかと思われる。ほかにも、李隱之はまず「殯を河南府河南県平楽郷の原にうつし」、開元廿七年五月に妻の劉氏と合葬となり、新たな墓は「公の旧塋の西南一里半」にあった。李懷は、天宝四載四月二十二日に妻の王氏と「洛陽県平楽郷の原、周礼に従う」に合葬された。つまり、李隱之・李懷の父子の墓は一つの区域内にあったのだ。これは、唐人の家族父子が共同の墓地を持つという慣例に準じている。しかし、上述のように、「李懷墓誌」は1928年の出土で、出土地周辺のほかの墓葬についてわからず<sup>(8)</sup>、しかも「李隱之墓誌」の出土の時期と場所も不詳である。その出土は、おそらく最近数十年の盗堀の風潮と関連していると思われる。しかし、その出土地は李懷墓の周辺地区であるはずだ。

明らかに、李隱之・李懷の父子は入唐した高句麗化した漢人の後裔であり、彼らの生活の軌跡と純粋な入唐高句麗人とは相当に違いがあったのである。特に墓誌に記載された李懷の活躍、すなわち唐の玄宗が「韋氏の乱」を平定したときに立てた勲功は、李氏家族が入唐した数十年後に再び出会ったチャンスであった。これを思うと、「時勢こそが英雄をうむ」という感慨を持たざるをえない。

## 2. 高牟墓誌

「高牟墓誌」の拓本の発見者である楼正豪氏の論文によれば、「高牟墓誌」の出土の時期と場所とは不詳で、原石は行方不明、墓誌の拓本だけが残っており、洛陽の個人蔵である。墓誌は正方形

で、一辺の長さ 45.5 センチメートル、四側面に線刻の唐草文がある。誌文は楷書 19 行、満行 19 字、全 282 字、人、授、地、年、月、日、載、聖などに則天文字が使われ、撰書者も不詳である。

#### 大周故左豹韜衛將軍高君墓誌銘并序

君諱牟、字仇、安東人也。族茂辰韓、雄門營偃、伝芳穢陌、声高馬邑。忠勇之操、侍楷矢之標奇；韓師之能、跨滄波而逞駿。是以早資權略、夙稟枢機、候青律以輸誠、依白囊而獻款。授雲麾將軍、行左領軍衛翊府中郎將。任隆韜禁、俯蘭錡以申謀；位列爪牙、仰熏風而飲化。轉冠軍將軍、行左豹韜衛大將軍。既而痾瘵、旋及隙景、爰馳西山之藥、不追北地之魂、永逝以去。延載元年腊月卅日薨於時邕之第。三韓流涕、十部分哀、悲纏東海之東、痛結外荒之外。以聖曆二年八月四日窆於洛州合宮縣界北邙山、之礼也。春秋五十有五。悲笳切迴、靈旒飄空、恐懿跡之遽沈、愴嘉名之不紀、式凭琰石、以表芳声。其詞曰：

辰韓遼復、穢陌蒼忙。懷忠效節、仰化帰皇。趨馳武衛、出入鷹揚。榮分列禁、譽滿遐方。將申茂績、遂奄頽光。悲深閨水、慟切韓鄉。小山落秀、大樹沈芳。墳塋闐寂、松楸淒涼。庶斯銘之無泯、与懸象以恒彰。

高牟という人は、現存文献史料に記載がみられず、清朝の編纂になる『全唐文』に収録された唐人の判文に見えるだけである。楼正豪氏は、高牟の出身と入唐した背景、入唐活動などから、墓誌銘が関連する諸問題を検討している。特に墓誌文の句読点の検討は、完璧と称するにたり、読者が高牟の事跡を理解するのに助けとなる。筆者は、現存の入唐した高句麗第一世代の移民の墓誌を整理した。戦場で殉死したり、害されて恨みをのんで死んだり、誌文に表現されていない者などを除くと、墓主の死後、その子弟や後人の哀悼やそれへの影響を提示しているものは、「高牟墓誌」が比較的獨特であることがわかった。対比に示してみよう。

「泉男生墓誌」以儀鳳四年正月廿九日遘疾、薨於安東府之官舍、春秋卅有六。震辰傷輦、台衡怨笛、四郡由之而罷市、九種因之以輟耕。

「泉男産墓誌」邙山有阡、長没鍾儀之恨；遼水無極、詎聞莊舄之吟。故国途遙、精車何日。鶴飛自運、令威之城郭永乖；馬鬣空存、滕公之居室長掩。

「高玄墓誌」泉台杳杳、終無再見之期、蒿里〔綿綿〕、永絶□言之会。嘆桑田之有革、惧陵谷之將移、勒石紀功。

「高足西墓誌」駟馬悲鳴、三軍飲泣、春人輟相、工婦□□。

「高提昔墓誌」秦鏡悲其鸞戩、孔匣詠其龍沈。遂使閭閻宿交、望素車而下泣；里閭親好、輟朱紱以表哀。

「高牟墓誌」三韓流涕、十部分哀、悲纏東海之東、痛結外荒之外。

高牟は、武周の延載元年（694）腊月卅日に、神都洛陽の時邕坊の私第で亡くなった。この時の官職は「冠軍將軍、行左豹韜衛大將軍」、正三品である。とはいえ、誌文中には彼の死が武周政權に与えた影響などにはふれず、「三韓」「十部」「東海」「外荒」など、高牟が入唐する前の故

郷の名称がいきなり示されている。上引の「泉男生墓誌」にも「四郡」「九種」、「泉男産墓誌文」にも「遼水」「故国」といった字がみえるが、「高牟墓誌」のように、朝鮮半島の部族や地域がこのように多く出現しているのは、あるいは高牟の高麗移民たる身分を突出させると同時に、彼が生前にひきいていた部隊が朝鮮半島から来た者で成っていたことを強調しているのかもしれない。もちろん、高牟は入唐後に雲麾將軍を拜して、正四品下の左領軍衛翊府中郎將を受け持っており、「その府校尉、旅帥、翊衛の属は以て宿衛し、その府事を総べる」<sup>(9)</sup>という。後に正三品の左豹韜衛大將軍に昇進した。その職掌は『唐六典』に次のように記載されている。「職掌如左、右衛。其異者、大朝会則率其属被黑質鍪、甲、鎧、執黑弓箭、黑刀、黑帔、建青麾、黑麾、黄龍負図旗、黄鹿旗、騶牙旗、蒼烏旗、為左、右廂之儀仗、次立武衛之下。翊府翊衛、外府羽林番上者、則分配之。在正殿前、則以諸隊立於階下；在長樂、永安門内、則以挾門隊列於兩廊。凡分兵主守、則知皇城東、西面之助鋪」<sup>(10)</sup>。上述の比定が成立するとすれば（訳注：高牟の役職が『唐六典』の通りだとすれば）、唐朝ないし武周の宮廷警護部隊か、あるいは宮廷儀仗隊の中に高句麗の軍兵がいたと推定できるのではなからうか。そうでなければ、墓誌で高牟の死んだ後に、三韓や十部などが哀傷したことを語るいわれもない。

このほか、高牟は武周の延載元年（694）に亡くなり、聖暦二年（699）年に埋葬、その間に五年もの時間がたっている。これもやはり、入唐高句麗移民で、特に唐で重要な職務を負った者にはめずらしいことである。いかなる原因によって、高牟のなきがらが地下でやすらぐのにかくも時間を要したのか？彼の死の影響が小さかったからか？明らかにそうではない。正三品の左豹韜衛大將軍とは、名誉赫赫たる人物であるはずだ。それとも、酷吏による政治的な問題なのか？しかし、最終的な高い評価や、酷吏たちが歴史舞台から退場した時期などからして、何ら問題を見いだすことができない。それとも、高句麗人としての身分の関係か？こうした要素もないようだ。あるいは、武周政権の何かのタブーに触れたのか？などなど、史料が欠如しているために、こうした問題は答えに至ることがむずかしく、今後の問題とするしかない。

### 三、高乙德墓誌銘

王連龍論文によると、「高乙德墓誌銘」は互聯ネット（訳注：中国のインターネット・オークション）に出たもので、葛継勇論文が拓本収拾と研究のプロセスを詳述している。李成制・余昊奎論文は、個別の専門的な問題に自説を提出している。

周冠軍大將軍行左清道率府頻陽折衝都尉高乙德墓誌

諱德、卞国東部人也。昔火政龍興炎靈、虜挾三韓、競霸四海。騰波白日、降精朱蒙。誕□大治燕土、正統遼陽。自天而下、因命為姓。公家氏族、即其後也。門伝軒蓋、経往代而聯榮。宗繼冠纓、歴今辰而疊彩。祖岑、東部受建武太王中里小兄、執珣事、縁教責追珣事、降黜外官、転任経歴数政、遷受遼府都督、即奉教追受対盧、官依旧執珣事、任評台之職。父孚、受宝藏王中里小兄、任南蘇道史、遷陟大兄、任海谷府都督、又遷受太相、任司府大夫、承襲執珣事。公年纔立誌、仕被邦官、受中里小兄、任貴端道史。

暨乎大唐龍朔元年、天皇大帝勅發義軍、問罪遼左、公率兵敵戰、遂被生擒。聖上舍其拒抗之愆、許以歸降之礼。二年蒙授右衛藍田府折衝長上。至總章元年、高麗失政東土、歸命西朝、勅以公奉国尽忠、令檢校本土東州長史。至咸亨五年、蒙授左清道率府頻陽府折衝。至大周天授二年、加授冠軍大將軍、余并以旧。何期逝水不定、生涯有限。至聖曆二年二月八日、遂於所任枕疾而終、春秋八十有二、權殯私第。至大足元年九月廿八日、發塋於杜陵之北合葬、礼也。煙雲黯曖、原野蒼茫。寒泉噎而含悲、風樹吟而結嘆。恩既不逮、悼亦何追。爰勒哀銘、式光殲誅。其詞曰：

美哉器幹、盛矣徽猷。衣冠二域、令譽千秋。宗標凶史、代秀英謀。雄懷勝氣、志潔清流。其一。赴勞不憚、耿心唯恪。武蘊六韜、仁深一諾。吐言蘭蕙、傾心葵藿。生建龍旌、止題龍閣。其二。忽從朝露、長偃夜台。佳城鬱鬱、玄壤莓莓。林寒葉攢、草晝霜皚。煙凝栢恩、風結松哀。其三。寂寥神理、蕭条人事。春色靡同、年光是異。幽明永隔、顏俗安值。式表殲良、鐫諸銘誌。其四。

じつは、筆者は去年（訳注：2015年）12月、洛陽師範学院でおこなわれた学術会議で「高乙德墓誌」の誌石、誌蓋の拓本を見ることができた。その出土地は西安で、盗掘のうへ洛陽に運ばれ、洛陽の個人に収蔵されて、人目に触れないようにされていたものと筆者はみている<sup>(11)</sup>。現在発表された4篇の論文から見ると、墓誌文中の文字の解釈についてはまだ意見の相違もあるが、高乙德の出身、家系、墓誌中にみえる高句麗末期の地方・中央官制に関する記載の史料的価値認定などでは意見が一致しており、ここでさらに述べるべきことはない。

注意にあたいするのは、高乙德は龍朔元年（661）に唐軍の捕虜となって入唐した点である。これについて、墓誌には詳しい記載はないが、王連龍氏は次のように論証している。

龍朔元年九月、契苾何力が鴨緑江の役で撃破し、「其の時に賊は遂に大いに潰れ、追いて奔ること数十里、斬首すること三万級、余衆は尽ごとく降り、男生のみ僅かに身を以て免がる」とされるから、高乙德はおそらくその中にいたのだ。墓誌の記載によれば、高乙德は生け捕りになったが、礼遇を受けたようで、唐朝廷は帰降の礼をもって彼を遇し、龍朔二年には右衛藍田府折衝長上を蒙授した。

葛継勇氏はこの点具体的に論じていないが、李成制にも似た論述がある。いずれにせよ、高乙德とのちの戦争であいついで唐に投降した高句麗軍人とは違いがある。高乙德が唐軍に「生け捕り」にされたのは、両軍の血みどろな奮戦において、はたして力尽きたのか、それとも敵を避けて隠れていたのか。しかし最終的には、降伏せずに生け捕りにされた。この点から考えると、高乙德は現存する24件の高句麗人墓誌の墓主の中でも確かに別格だと称するにたふ。もちろん、当時の状況下で、高乙德のように積極的に抵抗した高句麗軍人は、必ずや少なかったであろう。史料が欠如しているために、我々の認識が少ないだけであろう。しかし、敗戦して後戻りできない状況に直面して、高乙德も唐朝に降伏する道を選んだ。これは、總章元年に唐と新羅連合軍が高句麗を滅亡させた戦闘の反映なのである。



高乙徳は82歳という高齢で亡くなった。これは既知の高句麗移民の中で長寿といえ、これ以前の高足西および百済移民の陳法子を超えている。同時に、高乙徳は「聖暦二年二月八日に至って、遂に任ずる所において疾に枕して終る。春秋八十有二、殯を私第に権にす。大足元年九月廿八日に至って、墳を發けて杜陵の北に合葬するは、礼なり」とあるから、亡くなってから2年半後に長安城南の杜陵の北に埋葬され、しかも「合葬」だったのだ！もちろん、ここでいう「合葬」とは一般的にみて亡くなった夫人と合葬したのであるが、高乙徳の墓誌文には、本人以外の息子や親などの家族は言及されていない。龍朔元年から聖暦二年（661-699）まで38年が経っており、高乙徳は入唐時に44歳、故国の高句麗の滅亡からも8年以後のことであると推算される。したがって彼は、おそらく唐朝で再婚したのであり、だとすれば夫人は唐人の女性であったはずだ。それから、聖暦二年から大足元年まで、その間も2年経っており、高乙徳の仮殯の時間は、上述の高牟ほど長時間ではないにせよ、やはり検討しておくべきことであろう。これについては、より多くの石刻墓誌史料が出土して、この時期の東アジアにおける人流のより具体的なことがわかるようになる拠り所が提供されることを期待するしかない。

#### 四、南单徳墓誌

「南单徳墓誌」は、2010年初に西安市東灊橋区紅旗郷の滻河東岸から出土し、2012年に西安碑林博物館に収蔵された。趙力光『西安碑林博物館新藏墓誌統編』および王菁・王其禕共著「平壤城南氏：入唐高麗移民新史料：西安碑林新藏唐大暦十一年〈南单徳墓誌〉」などによると、南单徳墓誌の誌文作者は「中大夫行秘書省著作佐郎薛夔撰」、書者、刻者は見えない。誌文は全24行、行25字、楷書。誌石の高さ43.5センチメートル、幅44.2センチメートル、厚さ7.5センチメートル、墓誌蓋は無い。

大唐故饒陽郡王南公墓誌銘并序

中大夫行秘書省著作佐郎薛夔撰

夫人之在生、皆有定分。至於修短、互各等差。況行年八旬、足比上寿。故饒陽郡王諱单徳、字单徳、昔魯大夫蒯之後、容之裔也。公生居平壤、長隸遼東。自隨室已來、其国屢阻王命、累歲征伐。曆至于唐、太宗惣戎、親幸問罪、軍師太震、瓦石俱焚。時夔曾祖行軍大惣管平陽公環甲先驅、隳拔城邑、生擒其王莫麗支、斬首獲俘、不可勝計。因此分隸遼東、子弟郡県散居。公之家、子弟首也、配住安東。祖狄、皇曆米州都督。父于、皇帰州刺史。昆弟四人、单徳元子也。

累在辺鄙、忠勤日聞。開元初、上知素有藝能、兼閑武略、留内供奉射生。後属両蕃乱離、詔付夔祖汾陰公駑使、頻立功郊、授折衝果毅、次至中郎將軍。旋以禄山背恩、俶擾華夏、公在麾管、常懷本朝。復遇燕郊妖氛、再犯河洛、元首奔竄、公独領衆帰降。上念勲高、特錫茅土、封饒陽郡王、開府儀同三司、左金吾衛大將軍、食邑三千戸。每思報主、願竭懇誠。於戲！上天不假永寿、以大暦十一年三月廿七日寢疾、薨于永寧里私第、春秋七十有八。夫人蘭陵蕭氏。嗣子玠貢、正議大夫、試太常卿、兼順州録事參軍。夫人□女、長末初笄、居公之喪、哀

毀過礼、悶擗初咽、絶漿七朝、耳目所聞、吁而灑泣。上佳忠義、賜之束帛、并給□部、葬加殊等。恩深霈沢、存歿光榮。以其年四月廿八日葬于万年県崇義郷胡村白鹿之西原、礼也。其詞曰：

懿乎純確、立操堅貞。少習流矢、攻戰成名。其一

□心上答、靜難辺陲。未□丹懇、二豎交馳。其二

□□孤墳、□対原野。魂散□□、千年永謝。其三

「南单徳墓誌」によれば、南单徳は唐の大暦十一年（776）三月廿七日に京師長安永寧里の私第で亡くなり、享年78歳。年齢から推算すると、南单徳の出生は699年。20年を一世代とすると、南单徳は高句麗移民の第三世代か第四世代である。大暦十一年十月廿八日、南单徳が亡くなって一か月後、「万年県崇義郷胡村白鹿之西原」に埋葬された。万年県崇義郷は、今の西安市東郊の十里鋪一帯である。『唐代墓誌彙編』『唐代墓誌彙編続集』におさめた墓誌資料には、死者の埋葬地を「万年県崇義郷南姚村」「万年県崇義郷白鹿原」「万年県崇義坊」とするものが多い<sup>(12)</sup>。崇義郷南姚村は中唐の著名な藩鎮である何弘靖およびその子孫の墓地の所在地であることが、これらの墓誌から証明される。しかし、「南单徳墓誌」のいう「万年県崇義郷胡村白鹿之西原」は初めての例である。つまり「南单徳墓誌」は、唐代京師万年県崇義郷の管轄内に新たな村名を提供するもので、唐長安万年県の基層の行政組織の研究にとって新たな史料である。

## 1. 「子弟」と城傍子弟

「子弟」「城傍」および「城傍子弟」については、『陳子昂文集』巻10「為建安王与遼東書」に「營州士（土）人及城傍子弟近送密款、唯待官軍」とある。『唐六典』巻5「兵部郎中」に「秦、成、岷、渭、河、蘭六州有高麗、羌兵。（皆令当州上佐一人專知統押、毎年兩度教練、使知部伍。如有警急、即令赴援。諸州城傍子弟、亦常令教習、每年秋集本軍、春則放散）」とある。高句麗移民の「高玄墓誌銘」には「（永昌元年）奉敕差令諸州簡高麗兵士、其年七月、又奉敕簡洛州兵士、便充新平道左三軍總管征行」とある。「南单徳墓誌」には「時夔曾祖行軍大総管平陽公環甲先駟、隳拔城邑、生擒其王莫麗支、斬首獲俘、不可勝計。因此分隸遼東、子弟郡県散居。公之家、子弟首也、配住安東」とある。

南单徳の誌文に2回「子弟」とあり、そのうち後者には「公之家、子弟首也、配住安東」という語句がある。これに対して、上述の王菁、王其禕、樓正豪各氏の論文では詮索されていない。じつは、この「子弟」は「城傍子弟」の簡称だと筆者には思われる。「子弟首也」とは、唐朝が南氏家族を安東都護府の管轄内に配置し、重任を負わせたと解釈できる。つまり、ある城傍の兵民の管理する任務を引き受けさせた。唐代の城傍については、先には日本の日野開三郎氏が、国内では方積六、李錦繡<sup>(13)</sup>、王義康<sup>(14)</sup>各氏が論文発表をしており、特に李錦繡氏の論述はすこぶる全面的に立ち入っている。同時に、これらの研究者は、いくつかの問題については意見を異にするものの、城傍を唐朝が入唐した辺境民族を安置させる施策とし、城傍子弟はある種の蕃兵組織だとしている点では、見方は一致している。上引『唐六典』と「高玄墓誌銘」によれば、唐朝ないし武周政権には、各地に分散する高句麗など蕃族の兵士に対して、定期的な点検制度が

あった。毎年2回の練兵は、辺境の予期せぬ必要に答えるためであった<sup>(15)</sup>。特に、各州県の城傍子弟が、秋の農閑時に集中的に練兵し、春には解散して農耕生産に従事することが示されている。墓誌の作者は唐の秘書省著作局に任職しており、7世紀中葉の高句麗およびその他の民族の人士が入唐し、唐朝が東北などの地に安置する施策について、よく理解していたのである。しかも、彼自身が南単徳の家族と固有の関係を持っており、ゆえに「子弟」という呼称を南単徳の先祖に書いている。当時「城傍」が高句麗などの民族の入唐した人士を安置する手段であり、「城傍子弟」が普遍的に存在した史実があきらかとなる。

南単徳の家族は、高句麗滅亡後、城傍子弟として唐朝によって分散して安置され、城傍子弟の首領となり、安東管轄下の城傍に居住したのである。そのみならず、当時、回復した遼東の高句麗旧地であって、城傍は帰順した高句麗軍兵を安置する主要な行政単位となり、唐朝の郡県組織と同様な職能を備えていたのである。そしてその後の歳月において、唐朝ないし武周王朝のために東北辺疆を護持する作用をもたらした。唐の玄宗時代の重要な大将である王思礼は、「営州の城傍の高麗人なり。父の虔威は、朔方軍将と為り、習戦を以て聞こゆ。思礼はわかくして戎旅を習い、節度使の王忠嗣に随って河西に至り、哥舒翰と対して押牙と為る」<sup>(16)</sup>という。南単徳の祖父の南狄、父親の南于の二代は、先に安東都護府の管轄下の城傍に安置され、何らかの職務を受け持ち、後に安東都護府管轄の磨米州、帰州の二地に任官し、唐朝の東北辺境の安寧に功績をあげたわけである。

## 2. 南狄が磨米州都督を担当したこと

南単徳の祖父の南狄は、磨米州都督の職を担当したことがある。誌文の「皇唐」および南単徳の年齢から、その祖父の年齢を推算してみると、南狄が磨米州都督を担当したのは、唐と武周政権が交替したあとだと考えられる。つまり、上述の推論のごとく、南単徳の祖父の南狄が659年前後に生まれたとみてよいとしたら、高句麗滅亡の時はわずかに十余歳であるから、父親について安東城傍に安置されたのであり、7世紀中後期になって唐朝の磨米州都督を担当したのは、二三十年後のこととなる。遼東磨米城については、史書の記載は必ずしも同じではない。筆者は『旧唐書』巻39「地理誌」の記載にもとづき、磨米州は安東都護府の管轄下の十四州府の一つであり、時間の推移によって、磨米州の治所の所在は次第に行政軍事の中心を形成し、そのため磨米城が出現することとなった、と考えてみた。南狄が磨米州都督を担当したのは、武周政権が磨米城を回復したのちであろう。磨米城の位置については、筆者は以前の論文で考察したことがある。そこでは王綿厚氏の観点に同意し、「いま新・旧唐書の記載に従えば、本溪県下堡山城がよりその景観に符合する」<sup>(17)</sup>とした。そのほか、高句麗移民たる高性文・高慈父子は、武周時期に当地の軍民を率いて、磨米城を堅守し、契丹の進攻に奮戦した。磨米城の戦いで、高性文・高慈父子は壮烈な犠牲となった。現存する「高性文墓誌銘」には、磨米城の戦いの激しさと高氏父子の英雄的ながんばりが記されている。「衆寡力殊、安危勢倍。城孤地絶、兵尽矢窮。日夜攻围、卒従陷没。為虜所執、詞色慄然。不屈凶威、遂被屠害」。墓誌銘は一転して武則天の詔敕をいう、「高性文既能脱衣、招携運藩、宜内出衣一副、并賜物一百段。又、性文下高麗婦女三人、固守城隍、与賊苦戦、各賜衣服一具、并賚物卅段」<sup>(18)</sup>。磨米城の戦は697年におこった。武周の軍隊と当

地軍民は、ほとんど全軍が覆没。南狄が磨米州都督を担当した具体的な時期は、史料がないため定論しがたい。しかし、南狄の年齢と当時の状況から分析するに、南狄が磨米州都督を担当したのは、この戦いのあとであろう。

### 3. 唐朝の開放寛容性と民族融合

「南单德墓誌銘」の作者は薛夔である。王菁・王其禕の研究によると、薛夔は唐初の著名な将領である薛仁貴の後裔であった。薛仁貴は645年に唐の太宗が高句麗に親征した戦いに直接参与し、多くのすぐれた功績をあげた。そのあと、彼は詔を奉じて何回も朝鮮半島に出征し、高句麗を滅亡させる戦いでも目立つ功績をあげた。それからさらに、新羅を征伐する戦いを指揮した。まさしく7世紀中葉の唐朝で名実兼ね備えた將軍の一人であった。墓誌銘文にも明らかな記載があり、薛夔は「中大夫行秘書省著作佐郎」に任じられ、「時夔曾祖行軍大惣管平陽公擐甲先駟、隳拔城邑、生擒其王莫麗支、斬首獲俘、不可勝計」という。そして南单德の先祖は、この戦いの後に平壤から遼東一帯に移転した。問題はこうだ。南单德のために墓誌を書くという任務が、なんと薛仁貴の子孫によって受け持たれたという奇遇に驚かされるではないか！これはどういうことなのか？墓誌の記載によれば、南单德本人は、先に京師長安で「内供奉射生」となり、そのちに薛夔のおじたる汾陰公の薛某<sup>(19)</sup>の麾下で官を得て、中郎将に至った。安史の乱が爆発したあと、南单德は強迫されて反乱に参加、しかし「公は麾下にあって、常に本朝をおもう」、そのため最終的には「衆をひきいて帰降」した。かくして唐朝から饒陽郡王、開府儀同三司、右金吾衛大將軍、食邑三千戸に封ぜられた。これについて、楼正豪氏は「兩蕃乱離」「燕郊妖氛」という二句から解釈を加えているが、詳細にわたるため、ここでは贅言しない。南单德と薛夔の家族とのルーツの関係によって、南单德のほうが薛夔よりだいぶ年長だったが、二人は相当早くに知り合い、薛夔は南氏の家族が入唐した後の任官情況をもかなり了解していた。さらに、薛夔は秘書省著作局で佐郎を担当したゆえに、正三品級の官職にあった南单德の墓誌銘を書くという任務が彼にあてがわれたのである。

このほか、南单德が蘭陵の蕭氏を妻としたこと、籍を長安において最終的にはここに安葬されたことは、王菁・王其禕両氏が次のように述べたとおりである。「南单德墓誌」の出土は「入唐高句麗移民の帰属意識と民族的アイデンティティの問題、および彼らが唐人の共同体に溶け込むプロセスを検討するのに、新たな資料を増やしてくれた。それとともに、中国を中心とする視点・角度に立って、中国古代王朝と周辺関係の‘朝貢体制’問題下における唐朝と朝鮮半島の宗藩関係を探究するのにおいても、一つの典型的な個別例を提供してくれる」。つまり、中唐以後、高句麗移民としての主体的意識はもう存在なくなり、出自はたんに先祖の来源の在りかを示すだけとなる。突厥、回紇などその他の入唐民族の人々と同じように、南单德の家族は唐人同様、同じ地域に暮らし、共同の心理的願望を持ち、唐人の共同体の一成分となる。

南单德と同じような経歴の高句麗移民の後裔として、現在みいだせるものに泉毖、高德、高欽德、高運望、高震、高震のむすめ、および文献史料中にみられる王毛仲、高仙芝、王思礼、李正己などがある。これらの人々の墓誌銘あるいは関連する文献史料は、すべて彼らの出自を表明している。しかし、すでに移民の第三世代あるいは第四世代であるゆえ、その生活区域は、個別な



人を除いて、普通は唐朝の長安・洛陽およびその周辺地区である。彼らのなかで唐朝の武将となった者も多い。結婚対象は、だいたい唐朝の漢人か、入唐したその他の民族の女性で、もとの民族の女性と結婚した例はとても少ない。つまり、入唐した高句麗移民の後裔は、第三世代以後、もと遼東地域に生活した者、その後裔みな多くは兩京地区に移り、民族融合を加速させて、生活や習俗、家庭構成、行動規範などは、ほとんど唐人と相違がなくなる。これは、当時の民族融合が進んだ空前の状況を呈している。

墓誌にみられる中古時期の中原の南氏の変転プロセスや、その家族がいかにして戦乱を避けて遼東の平壤に移ったか、また唐代にあらわれる南氏の人物に、ほかに入唐した高句麗移民として南単徳の家族と似たような経歴の者がいるかなどについて、上述の王菁・王其禕両氏の論文に論述があるので、ここでは贅言しない。

## 結 語

本稿では、中国と韓国の学会における既往の研究を基礎に、近年新たに発表された5件の入唐高句麗移民の墓誌の研究で、いまだ議論されていない問題について新たに解釈してみた。7世紀中葉の唐と朝鮮半島政権との複雑なやりとりによって、双方の人流は非常に頻繁であった。本稿では朝鮮半島から来た高句麗人の墓誌5件を扱ったが、より多くの場合は、唐人の軍人が朝鮮半島に行ったことであろう。ある者は不幸にも異郷に命を落とし、ある者は幸運にも戻ることができた。こうした双方の戦争と和平のからみで、人々が移動を余儀なくされる流動方式は、この時期の東アジアにおける大規模な動揺と組み直しの現実を示している。だが8世紀以後の東アジアでは、人流はより主体性と柔軟性を豊かに持つこととなる。それは、唐朝の開放的で寛容な政策が東アジアに広く及び、東アジア各国の律令制度の建設や、人流の経済・文化的な価値としてあらわれる。高句麗移民の後裔である南単徳の墓誌は、歳月の経過に洗われて、高句麗移民の後裔も、その他の入唐民族と同じく唐人の中に溶け込み、唐人の共同体中の一員となった事実を示している。

最後に、王其禕、周曉薇、王菁、金榮官、樓正豪、王連龍各位先生に感謝を表します。これら先生方は、率先して新出史料を検討し、貴重な見解を出してくださった。筆者はその基礎の上に補充的な研究をおこなったのであり、これら先生方が先鞭をつけた功績は非常に大きい。今後、洛陽と西安において入唐高句麗移民の墓誌は陸続と出土することが予想される。こうした新史料が次々に出現し、研究者が探究に潜心することで、入唐高句麗移民の問題はさらに深く研究され、この時期の東アジアの人流の関係性についての問題は、さらに明らかにされていくと筆者は確信している。

## 註

- (1) 日本の学界では20世紀初めに内藤湖南などが関係の論文を発表し、中国の学界では1937年の羅振玉編『唐代海東藩閩誌存』以後、1990年代にこの領域にふみこむ研究者が次第に増えたが、これを主専攻にした研究者は多くなかった。韓国の学界では1960年代以後、李丙燾、盧泰暉らが活躍し、その後、李道学、李文基、鄭炳俊らが続いて呼応した。近年は金賢淑、金榮官、権惠永らが新出土

墓誌にみえる朝鮮半島原住民の資料を探索しようと、中韓を頻繁に往来し、高句麗、百済の移民に関する論文を多く発表しており、韓国学界における東アジア「人流」研究の最高レベルを代表している。

- (2) 拝根興『唐代高麗百済移民研究：以西安洛陽出土墓誌為中心』北京：中国社会科学出版社、2012年。拝根興『石刻墓誌与唐代東亜交流研究』北京：科学出版社、2015年。
- (3) 「高牟墓誌」は楼正豪「新見唐高句麗遺民〈高牟墓誌銘〉考釈」『唐史論叢』総第18輯、2014年。「高提昔墓誌」は王其禕、周曉薇『国内城高氏：最早入唐の高句麗移民——新發現唐上元元年〈泉府君夫人高提昔墓誌〉釈読』『陝西師範大学学报（哲学社会科学版）』2013年第3期、54-64頁。金榮官「高句麗遺民高提昔墓誌銘研究」『碑林集刊』総第19輯、三秦出版社、2013年。「南单德墓誌」は楼正豪「新見唐高句麗遺民〈南单德墓誌銘〉考釈」『西部考古』第8輯、北京：科学出版社、2015年。王菁、王其禕「平壤城南氏：入唐高句麗移民新史料——西安碑林新藏唐大曆十一年〈南单德墓誌〉」『北方論叢』2015年第1期。「李隱之墓誌」は、楼正豪「唐高句麗移民李隱之・李懷父子墓誌銘考釈」『韓國古代史探究』第21輯、2015年。「高乙德墓誌」は王連龍「高句麗遺民高乙德墓誌考析」『吉林師範大学学报』2015年第4期。葛継勇「高句麗遺民高乙德墓誌探討」『韓國古代史研究』第79輯、2015年。（韓）余昊奎「通過高乙德墓誌銘看高句麗末期的中裏制和中央官制」（韓）『百済文化』第54輯、2016年。
- (4) 拝根興「崔彦撝与羅末麗初僧侶塔碑撰述：兼論求法巡礼僧侶の往返線路問題」『社会科学戦線』2014年第9期を参照。
- (5) （韓）金榮官「高句麗遺民高提昔墓誌銘研究」『碑林集刊』総第19輯、三秦出版社、2013年。
- (6) 楼正豪「唐高句麗移民李隱之、李懷父子墓誌銘考釈」『韓國古代史探究』第21輯、2015年。
- (7) 前者は韓国『新羅文化祭國際學術研討會論文集』、韓国慶州、2002年。後者は『中国歴史地理論叢』2009年第1期を参照のこと。
- (8) 郭培育、郭培智主編『洛陽出土石刻論地記』、鄭州：大象出版社、2005年、第277頁。
- (9) （唐）李林甫等撰、陳仲夫点校『唐六典』卷24『諸衛』、北京：中華書局、2008年、第623-624頁。
- (10) （唐）李林甫等撰、陳仲夫点校『唐六典』卷24『諸衛』、第621頁。
- (11) 『祔寔進墓誌』『武承嗣墓誌』から「高乙德墓誌」までは、すべて西安とその周辺から盗掘して出土し、後に洛陽に運ばれ、個人蔵になったもの。西安洛陽間にはおそらく闇の文化財運び屋のつながりがあるようだ。盗掘から運送、収蔵、転売までを一手に引き受けた闇屋なのかはわからない。しかし、これは西安の公安の注意するところとなり、当局は文化財盗掘転売の摘発を進めている。
- (12) 筆者の検索によれば、周紹良・趙超主編『唐代墓誌彙編』、『唐代墓誌彙編続集』に、死後に万年県崇義郷に埋葬された者は全部で18人あり、そのうち8人の埋葬地は万年県崇義郷南姚村、それから崇義郷白鹿原、崇義郷之原、崇義郷□水東原などがあり、はっきり「万年県崇義郷胡村白鹿之西原」とあるのはこの1例にすぎない。
- (13) 李錦繡「“城傍”与大唐帝国」『学人』第8輯、1995年。
- (14) 王義康「唐代城傍辨析」『中国边疆史地研究』2002年第1期。
- (15) 拝根興『唐代高麗百済移民研究：以西安洛陽出土墓誌為中心』北京：中国社会科学出版社、2012年。
- (16) 『旧唐書』卷110「王思礼伝」。
- (17) 拝根興『唐代高麗百済移民研究：以西安洛陽出土墓誌為中心』、北京：中国社会科学出版社、2012年、第220-221頁。
- (18) 呉鋼等主編『全唐文補遺』第6輯、西安：三秦出版社、2005年。
- (19) 楼正豪氏はこの「汾陰公」は薛訥あるいは薛楚玉だとみている。前掲の楼正豪論文を参照。